

『物流 Weekly』連載原稿

「日本ロジファクトリーの物流ケース・スタディー」第1回

<タイトル> 「拠点間のノウハウ共有化で企業体質を改善」不採算拠点の効率化

<本文>

当社には、様々な業種・業態の企業から物流改善についてのお問合せを頂いている。昨今は電話のみでなく、E-MAILやホームページ経由での問合せも増加しており、その内容も多岐に渡っている。

ある日もいつもと同じようにメールによる問合せ内容をチェックしていると、1通の興味深い内容があった。内容は以下の通りである。

「社内に不採算拠点が発生しており困っている。その原因すら追求できていない。早急に改善をしたいので、是非、協力してほしい」

早速、電話連絡すると「訪問して詳しい話を聞かせてくれ」の短い言葉。私はすぐに都内某所にあるG物流本社を訪問した。

G物流は年商80億円、都内に本社を構えている。創業以来、運送業一筋の企業であったが、10年ほど前、古くから付き合いのある荷主から倉庫業務の請負を依頼され、ほぼ強制的に倉庫業務へ進出した。それが功を奏した形で荷主と共に売り上げを伸ばし続け、運送業だけでは10億強であった売り上げが80億強まで成長した企業であった。

今回、お問合せを頂いたのは立花専務（仮名）G物流社長から倉庫業務を一任されている人物であった。立花専務と応接室で顔を合わせると世間話も早々に本題に入った。

「我社の神奈川センターでは、Tストアの加工品（ドライ）や飲料の入・出庫業務、店舗配送を行っている。今年に入り物量が増大し、現場がパンク状態になってしまった。それをなんとかしのぐために人を投入したり、庸車に対応していたらコスト増となってしまうようだ。現場の改善意識は高いのだが、全社では唯一の不採算拠点となっているために何とかしたい」とのことであった。

早速、我々と立花専務との現場改善プロジェクトチームが発足した。チームは本社メンバーを中心に5名で構成。皆、改善意識が高く期待が持てるメンバーだった。

ところが、第1回の現場視察で私は愕然とした現場ではゴミがあらゆるところに落ちており、破損している商品も多数見受けられた。そして現場に全く覇気が感じられない。「立花専務は現場の改善意識は高いと仰っていたよな。本当にこれが売り上げを毎年伸ばしている企業の現場なのだろうか」と疑いたくなるほどであった。

我々プロジェクトチームは、現場の効率化と並行して現場の意識改革に取り組むことに照準を絞り、改善に着手した。

（次週に続く）